浄土教における懺悔道

幡谷　明

一

人間が虚妄の生を生きる虚偽と邪悪に充ちた存在である限り、その存在の根源的覚醒には、必然的に回心という体験があり、その回心には自身の罪業の自覚として懺悔を伴っている。

仏教において、懺悔と漢訳される言葉の原語としては、kṣama と āpatti-deśana, pratideśa. deśanā が挙げられる。一般的に懺悔の原語とされている前者は、自らの業苦に耐え、その罪を甘受することを意味しているが、それとともに、他に対して自身の罪業の忍容を請うという意味を内含している。それに対して後者は、自己の罪を覆蔵なく告白し発露することを意味しており、多くの場合懺悔発露と熟語される。[1] その懺悔と密接な関わりをもつものに慚愧ということがある。慚（hrī）と愧（apatrāpya, optrāpya）は、諸々の悪不善法を慚じ愧じることであるが、慚は悪を自己に対して厭うことであり、愧は悪を他に対して怖れ避けることと解釈されるのが通説である。[2] 懺悔と慚愧の関係について、一説には、懺悔には必らず罪業感があるのに対して、慚愧には智徳の不充分であることについての反省はあっても必ずしも罪業感を伴うということがないという見方がある。[3] しかし、智顗の『金光明経文句』（大正蔵巻三九・五九頁c）に、懺は慚、悔は愧と解説しており、『涅槃経』梵行品（大正蔵巻一二・四七七頁b―c）でも、慚愧は懺悔と

同一視されているようであって、両者の区別は必ずしも明確ではない。

原始仏教、小乗仏教の教団では、出家者に対して二百五十戒あるいは三百戒という厳格な戒律が制定され、出家者は、月二回の布薩、夏安居の終りの自恣において、出家者達の面前で戒律の遵守をめぐって反省し、制定の罪を犯した者は懺悔したことが、律蔵によって知られる。その場合懺悔は、一定期間内における破戒についての懺悔、所謂随犯随懺であり、無始時来の過去を背負える存在それ自体についての懺悔とは異っている。出家者の懺悔は、本来は僧伽の堅持を目的とした真摯な自省の態度に基づいて行われたものであったと思われる。しかし、そこには戒律の形骸化・懺悔の形式化ということも恐らくは起こり得たことであろう。舎利塔を中心とする在家信者の側から興起した大乗仏教は、小乗仏教の戒律主義に対する批判の意図をも一つの要因として孕むものであった。五戒あるいは十善業という在家者における基本的倫理は、出家者の戒律とは余りにも隔たりがあり、出家者の側からすれば、凡そ戒律の名にも価しないものである。しかし、在家者にとっては、五戒すら遵守出来ないのが現実の実相である。そこで尚、戒が人間の基本的条件として決定付けられるならば、それは生存それ自体を容認しないものとして、却って人間を非人間化するものといわなければならないこととなる。大乗仏教の最初期に懺悔が重要な実践徳目として説かれたことは、今日汎く認められているところである。例えば、後漢・安玄訳の『法鏡経』（大正蔵巻一二・一八頁c）に在家菩薩の実践行を次のように説いている。

是以当稽首十方諸仏、亦彼前世求道所行志願之弘願者、一切成就仏法之徳、以思念之以代其喜、於是昼三亦夜三以誦三品経事一切前世所施行悪以曰首誨改往修来。

ここにいう「改往修来」が懺悔に当ることは、智顗の『金光明経文句』（大正蔵巻三九・五九頁a）に、「又懺名修来悔名改往」と説明していることによって知られる。ここでは、十方諸仏の前で昼夜六時に『三品経』を読誦して、過去世からの罪業を懺悔することが説かれており、その『三品経』が懺悔・随喜・勧請について説いた経典であること

は、『舎利弗悔過経』、『郁伽長者会』、『大智度論』等の他の諸経論によって推察されている。[4] 懺悔・随喜・勧請という懺悔を中心とする三悔（三聚）は、後に回向を加えた四悔、更に発願を加えた五悔として展開しているが、大乗仏教の最初期に、十方諸仏思想と関連して、無始時来性の罪業に対する懺悔が、重要な実践徳目として説かれたのは、それまでの戒律に替るものとして提起されたものと考えられている。[5]

その懺悔を主題とする経典としては、殊に『金光明最勝王経』（大正蔵巻一六）が有名である。この経典は、『般若経』や『法華経』等とも密接な関連性を有するが、その中心は、夢見金鼓懺悔品（四一一―四一三頁）にある。そこでは夢中に金鼓の懺悔の音声を聞いて罪業を発露し、それによって罪業の浄化されることが説かれている。そして讃嘆品では、その懺悔も宿世における如来の恩徳によるものであることが示され、更に空品では、懺悔の心によってのみ一切皆空の道理は身証されることが顕わされている。要するにこの経典の主題は、一切の行為が懺悔の心においてなされる時、それがすべて仏道となることを示す点にあり、懺悔を通して仏寿の無量を念持する念仏三昧の徳を顕わすことにある。[6] この『金光明経』にみられる仏道の成立根拠が懺悔にあるという思想は、大乗仏教における一つの底流として注目すべきものである。では、人間存在について罪業感を通して探深的に究明した浄土教において、懺悔の問題がどのように説かれているか、以下その点について窺っていくことにしたい。

二

『大無量寿経』下巻の悲化段には、仏陀の大悲によって智見せられた衆生における生死流転の相が、貪・瞋・痴の三毒と、それに基づく五悪・五痛・五焼として、過現未の三世にわたる業報・輪廻の生々しい状態を通して、鮮烈刻明に説かれている。それは、古訳の『大阿弥陀経』において最も詳細に説かれており、『平等覚経』を経て『大無量寿経』に至る間にその内容が次第に整備せられているが、それ以後の『如来会』、『荘厳経』・梵本・チベット本等で

は見られなくなっている。その点において、現在その箇所は中央アジアで付加されたと見る説が有力であるが、その悲化段の素朴な教説は、例えば『パーリ増支部』Ⅲ65に貪・瞋・痴の一々について、

また伽藍衆よ、この貪心ある人は貪に蔽われ、心把われ、生物を殺し、与えられざるものを取り、他人の妻と通じ、虚誑を語り、また他人にこのようにすることを勧める。これは彼に長夜の無益と苦とを与う。[7]

と説かれているところにも見出すことが出来るであろう。しかし、『大阿弥陀経』→『大無量寿経』は、それを最大限といってよい程に詳細刻明に説き明している。それがまさしく阿弥陀の本願により、釈尊の大悲によって救済されなければならない煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界の現実である。『大無量寿経』は、その無有出離之縁の凡夫に、出離の要道として念仏往生の道を説かれたものである。『大無量寿経』において、その生死罪濁の群萌は、阿弥陀の本願においても、釈尊による本願成就の教説においても、「唯除五逆誹謗正法」と表されている。「唯除」の密意については、曇鸞・善導・親鸞によって解明されてきたところであるが、それは究極的には「謗法闡提回心皆往」という善導の『法事讃』の文に示されるように、衆生における回心懺悔を通しての救済の成就を明らかにされたものである。

『大無量寿経』における懺悔道として、今一つ注意されるのは、悲化段に続いて説かれた智慧段の教説である。そこでは罪福信による仏智不思議の疑惑のため、五百年の間にわたって疑城胎宮にとどまる胎生の者について、三宝を見聞せず、菩薩の法式を知ることがないと、厳しく教誡されている。不見三宝は、浄土の内に在りながら、如来の僧伽である浄土を見ることの出来ない状態を象徴しており、菩薩の法式を知らないとは、懺悔・随喜・勧請の福徳を知らないことを示している。そこに仏智疑惑の衆生に対して、「識其本罪、深自悔責」と説かれており、厳しく回心懺悔を求められていることを見出すことが出来る。

浄土経典の中で、『観無量寿経』は、経典自体が「浄除業障生諸仏前」という経典の別名を挙げているように、殊に懺悔思想と深い関わりをもっている。この経典の序分には周知の王舎城の悲劇が説かれ、「今向世尊五体投地求哀

懺悔、唯願仏曰教我観於清浄業処」と請願する韋提希の苦悩が示され、その要請に答えて、「観極楽国土・無量寿仏・観世音菩薩・大勢至菩薩」の道が明かされていく。この経典の解釈をめぐって、浄影を始めとする聖道の諸師と、古今楷定した善導との間には大きな相違があることは、周知のところである。韋提希を実業の凡夫と決定し、凡夫救済の法である念仏滅罪を開顕する経典と領受した善導によると、この経典の底流に懺悔のあることは明白である。善導の懺悔思想については、後に改めて論述するので、そこに譲ってここでは省略するが、『観無量寿経』が「無有慚愧(下品三生)」といわれる一生造悪の下品の凡夫の救済を説く経典であり、凡夫における回心懺悔を明らかにする経典であることは説明を要しないであろう。

無問自説という形で釈尊の出世本懐を開顕した『阿弥陀経』は、経典中に「一切諸仏所護念経」と徴示されているように、六方の諸仏の念仏者に対する証成護念を説くものである。そこでは懺悔について直接的に説かれてはいない。しかし、その恒沙の諸仏の勧励ということの上に、その勧めによらなければ容易に脱け切ることの出来ない、専修而雑心の機における自力の執心、罪福信による仏智疑惑の深さを見出し、それを主体的に究明したのは親鸞である。すなわち機法の真実を説くこの経典に、第二十願の願意を探り隠顕の密意を感得したのは親鸞である。その鋭利な眼を通してこの経典を窺う時、そこに諸々の善本・徳本として自力の念仏を策励する者に対し、唯除と教えて、果遂の誓いを成就せんとする如来の大悲心が見出されるのである。それはある意味で、我々における最終的な懺悔を要請されるものということが出来るであろう。

以上、浄土経典にみられる懺悔思想について一瞥したが、浄土経典に拠って真宗を開顕した浄土の祖師において、懺悔の問題がどのように説かれているか、以下その点について窺っていくことにしたい。

三

大乗仏教の始祖といわれる龍樹は、『菩提資糧論』（大正蔵巻三二・五三〇頁b）、『宝行王正論』（大正蔵巻三二・五〇四頁c）等に四悔を挙げている。ここでは『十住論』の主題について解明した易行品の後に、更にその内容を展開するものとして説かれた除業品・分別功徳品について窺見する。

除業品は、冒頭に阿惟越致地すなわち不退転地の獲得の道は、易行品に示された憶念・称名・礼敬のみであるかを問い、余の方便として懺悔・勧請・随喜・回向の四悔を行ずべきことを説示している。そこに余の方便とあるのは、称名念仏以外の余の手段ともみられるが、それは念仏に内含され、念仏から必然的に展開してくる四悔を意味するものと解釈されている。[8] その四悔の中、懺悔が最も重視されていることは、次の分別功徳品（大正蔵巻二六・四八頁a―b）に、

問曰。汝但説二勧請随喜廻向中福徳一。何故不レ説二懺悔中福徳一耶。答曰。於二諸福徳中一、懺悔福徳最大。除二業障罪一故。得レ善行二菩薩道一行二勧請随喜廻向一与二空無相無願一和合無レ異。

と説かれていることによって知られる。そして同品には、

若人欲レ得二一切智慧不可思議智慧無礙智慧無上智慧一、亦応レ如レ是懺二悔罪業一無レ所二覆蔵一後不レ更作上。是故当レ知懺悔有二大果報一。

とも説き、その懺悔の殊勝性について、魔嵬（羅）、阿闍世、阿輸伽王の事跡を例証として強調している。それによって易行品に開顕された念仏は、除業品の四悔、分別功徳品の懺悔の顕揚と密接な関連性を有し、念仏が実には懺悔の法であることが表されているものと了解される。

龍樹を本師と敬礼した曇鸞は、『讃阿弥陀仏偈』において、『楞伽経』に説かれた楞伽の懸記により龍樹を讃仰した

後、

我従無始循三界、為虚妄輪所廻転。一念一時所造業、足繋六道滞三塗、唯願慈光護念我、令我不失菩提心、

と自身の罪業を懺悔している。そして次いで、

我讃仏恵功徳音、願聞十方諸有縁、欲得往生安楽者　普皆如意無障導　所有功徳若大小、廻施一切共往生、南無不可思議光　一心帰命稽首礼

と仏徳を讃仰し、一心帰命願生の志願を表白している。そこに懺悔と讃嘆の必然的関係を窺うことができる。なお、仏荘厳の讃嘆の後と、本書の最末尾には、

普為師僧父母及善知識、法界衆生断三障、同得往生阿弥陀仏国、帰命懺悔。

という偈が示されている。しかし、この文は善導の『往生礼讃』の文と同一であり、『往生礼讃』によって後代に付け加えられたものといわれている。

曇鸞が五濁無仏の時、煩悩成就の凡夫人という時機についての深い内省を有していたことは、『浄土論註』において明らかに知られるところである。如来の浄土の観察について明らかにした観察体相章では、如来の真実功徳によって照顕される不実功徳について、

従有漏心生不順法性。所謂凡夫人天諸善、人天果報、若因若果、皆是顛倒皆是虚偽。是故名不実功徳。

と示し、二十九種荘厳の一々において、その内実を詳説している。例えば、国土荘厳の総相といわれる清浄功徳釈では、次のように説かれている。

仏本所以起此荘厳清浄功徳者、見三界是虚偽相、是輪転相、是無窮相、如蚓蠖循環如蚕繭自縛、哀哉衆生締此三界顛倒不浄、欲置衆生於不虚偽処於不輪転処於不無窮処得畢竟安楽大清浄処。

そこに不実功徳とされる衆生の虚妄の生、および虚偽顚倒の境界に対する曇鸞の懺悔を見出すことができるが、曇鸞はそこに立脚して、浄土を建立せられた如来の大悲の願心を推求し、真実功徳の世界である浄土の意義を開顕していることが注目される。

そして、曇鸞は、その往生浄土の行である五念門について、その核となる讃嘆門釈では、

彼無碍光如来名号、能破二衆生一切無明一能満二衆生一切志願一。然有二称レ名憶念一而、無明由存而、不レ満二所願一者、何者、由下不二如実修行一、与二名義一不中相続上故也。

と述べ、不知二身と不淳不一不相続の心による不如実修行について釈明している。そこに示された称名憶念する身において、内に問われる不如実修行の問題は、まさしく曇鸞における深い懺悔を表明しているものとみることの出来るものである。曇鸞は更に往生の正機について明らかにした八番問答において、『大無量寿経』の第十七・第十八願成就文と『観無量寿経』下々品の文を引用している箇所で、下々品の引文中に、「当三以レ此償二五逆罪一也」という経文にない割註を付加し、謗法の者についてその不生を断言しているのは、曇鸞の宗教的自覚の厳しさを表顕している。

その曇鸞を介して帰浄した道綽は、大聖を去ること遥遠という事由と、理深くして解微という理由の二つに基づいて、聖道の難証と浄土一門の広開を明言した。それは一切衆生悉有仏性の真理も教理にとどまって行証の事実とならない悲傷において、正像末の三時に対する覚醒を促すものであった。道綽はその教証として『大集月蔵経』(巻五五)の五箇五百年説を引用するが、そこに「第四五百年、造二立塔寺一修レ福懺悔得二堅固一」とあり、経文にない修福懺悔という語が付け加えられている。道綽と同じく慧鑽門下であり三階教の開祖である信行も、修福懺悔を説いており、破仏事件に直面した当時における仏教徒の共通の危機感を示すものでもあったであろう。

しかし、浄土教の祖師において、最も深刻に懺悔を語っているのは、善導である。

四

懺悔の人ともいうべき善導においては、『観念法門』、『法事讃』、『般舟讃』、『往生礼讃』の具疏・『観経疏』の本疏の全体にわたって、その懺悔思想が表明されている。就中、殊に懺悔行儀を組織的体系的に論述しているのは、『往生礼讃』である。本書は、六時礼讃の通称が表すように、昼夜六時に弥陀を讃詠し、懺悔すべきことを説示している。善導はその前序に、専雑二修の得失を論ずる箇所で、

懺悔有二三品一。一要、二略、三広。

と、懺悔に三種あることを示し、以下において次のように解説している。

すなわち㈠要懺悔については、日没礼讃に次のように説かれている。

至心懺悔

南無懺悔十方仏　願滅二一切諸罪根一　今将二久近所レ修善一　回作二自他安楽因一　恒願一切臨終時　勝縁勝境悉現前　願観二弥陀大悲主　観音・勢至・十方尊一　仰願神光蒙二授手一　乗二仏本願一生二彼国一、

懺悔回向発願已、至レ心帰二命阿弥陀仏一

次に㈡略懺悔については、中夜讃に五悔を説く箇所で次のように示されている。

至心懺悔、

自二従無始受身来　恒以二十悪一加二衆生一　不レ孝二父母一謗二三宝一　造二作五逆不善業一　以二是衆罪因縁一故　妄想顚倒生二纏縛一　応レ受二無量生死苦一、頂礼懺悔願滅除

懺悔已至レ心帰二命阿弥陀仏一

至心勧請（乃至）、至心随喜（乃至）、至心回向（乃至）、至心発願（乃至）

次に㈢広懺悔は、日中礼讃に説かれ、『往生礼讃』において最も力説されているものである。

敬白。十方諸仏、十二部経、諸大菩薩、一切賢聖、及一切天龍八部、法界衆生、現前大衆等、証二知我一。甲某 発露懺悔。従二無始一已来、乃至今身、殺二害一切三宝・師僧・父母・六親眷属・善知識・法界衆生一、不レ可レ知レ数。

と述べ、殺生、偸盗、邪心、妄語、綺語、悪口、両舌、破戒等の罪、自作数他の罪、見作随喜の罪について説いている。広懺悔は三階教にも類似したものが見出されることが指摘されているが、[9]その広懺悔において注意されるのは、「懺悔有三品、上中下」と示して説かれた三品の懺悔である。

『往生礼讃』に説く三品の懺悔は、次のように、『心地観経』巻三報恩品（大正蔵巻三・三四三c―三〇四頁a）所説の三品の懺悔と対応している。ただ『心地観経』は善導滅後約百年を経て般若（七三三―八〇五？）が訳出したものであり『心地観経』に拠るものでないことは明らかである。しかし、『心地観経』に類するものが善導当時すでに存在し、それに拠ったと推考することは可能であろう。

『心地観経』	『往生礼讃』
若能如法懺悔者	当依二種観門修
一者観事滅罪門	二者観理滅罪門
観事滅罪有其三	上中下根為三品
若有上根求浄戒	発大精進心無退
悲涙泣血常精懇	哀感徧身皆血現
繫念十方三宝所	幷余六道諸衆生
長跪合掌心不乱	発露洗心求懺悔
唯願十方三世仏	以大慈悲哀愍我
	懺悔有三品上中下
	上品懺悔者、身毛孔中血流、眼中血出者、名上品懺悔。

我処輪廻無所依　生死長夜常不覚
我在凡夫具諸縛　狂心顚倒徧攀縁
我処三界火宅中　妄染六塵無救護
我生貧窮下賤家　不得自在常受苦
我生邪見父母家　造罪依於悪眷属
唯願諸仏大慈尊　哀愍護念如一子
一懺不復造諸罪　三世如来当証明
如是勇猛懺悔者　名為上品求浄戒
若有中根求戒者　一心勇猛懺諸罪
涕涙交横不覚知　徧身流汗哀求仏
発露無始生死業　願大悲水洗塵労
滌除罪障浄六根　於我菩薩三聚戒
我願堅持不退転　精修度脱苦衆生
自未得度先度佗　尽未来際常無断
如是精勤勇猛者　不惜身命求菩提
能感三宝霊異相　是名中品大懺悔
若有下根求浄戒　発起無上菩提心
涕涙悲泣身毛竪　於所造罪深慚愧
対於十方三宝所　及以六道衆生前

中品懺悔者、徧身熱汗従毛孔出、眼中血流者名中品懺悔。

下品懺悔者、徧身徹熱、眼中涙出者名下品懺悔。

至誠発露無始来　所有悩乱諸衆生
起於無礙大悲心　不惜身命悔三業
已作之罪皆発露　未作之悪更不造
如是三品懺諸罪　皆名第一清浄戒
以慙愧水洗塵労　身心俱為清浄器
諸善男子汝当知　已説浄観諸懺悔
於其事理無差別　但以根縁応不同

此等三品、雖有差別、即是久種解脱分善根人。致使今生敬法重人不惜身命、乃至小罪若懺、即能徹心徹髄、能如此懺者、不問久近、所有罪障頓皆滅尽。若不如此、縦使日夜十二時、急走、衆是無益。若不作者。応知、雖不能流涙、流血等、但能真心徹到者、即与上同。

善導がその結びにおいて、「雖不能流涙流血等但能真心徹到者即与上同」と述べているのは、極めて重要である。こゝに厳粛極まりない懺悔の表白を聞くことが出来る。すなわちたとえ下品の懺悔が不可能な者であっても、如来の真心が骨髄に徹到した金剛心の行人は、無慚無愧の身のままで懺悔する人と同じとされるところに、懺悔の極まりがある。

この『往生礼讃』とともに殊に注意されるのは、『般舟讃』の次の讃偈である。

誓願今生順二仏教一　行住坐臥専念仏　一切善業併須レ廻　念念時中常懺悔　終時即上三金剛台一一切時中望レ西礼
表二知凡聖心相向一　仏知三衆生心雑乱一　偏教三正念住三西方一……　唯恨衆生疑レ不レ疑　浄土対面不二相忤一　莫レ論二
弥陀摂不摂一　意在三専心廻不レ廻……
得レ免三娑婆長劫難一　特蒙二知識釈迦恩一　種種思量巧方便　選得三弥陀弘誓門一　一切善業廻生利　不レ如専念三弥陀
号一　念念称名常懺悔　人能念レ仏仏還憶

こゝに、念仏を懺悔として捉えた善導の立場が明確に示されている。

中唐の仏教全盛期に活躍した善導の教学が、浄影を始めとする諸師の教学と深い関わりをもっていることは周知のところであるが、今の懺悔については、殊に智顗と密接な関連性の見出されることが注意される。智顗が天台観法の前方便として懺悔を重視したことは、『法華三昧懺儀』・『摩訶止観』・『小止観』・『敬礼法』等において、主として龍樹の『十住論』に基いて懺悔の行法を説き、更に事懺（随事分別懺悔）と理懺（観察実相懺悔）―『普賢観経』（大正蔵巻九・三九二c―三a）では、大荘厳懺悔・無罪相懺悔と説く―について弁別していることによっても知られる。[10] 善導がそれらのことを充々承知していたことは、善導の『法事讃』に規定された諸法式が智顗の『法華三昧懺儀』『敬礼法』の実践行儀を骨子として明らかにされていることが指摘されていることによって知られる。[11] しかし善導の場合、懺悔に事懺と理懺を分けることはない。ただ理懺は事懺を止揚した立場であり、善導においては称名念仏が事懺であるとともに、それが如来の本願力増上縁に乗托するものであることにおいて、そのまま理懺の意味をもつものであったとみるべきであるかも知れない。そしてそれが善導に限らず、念仏そのものの働きであると領解することも可能であろう。

以上、行儀分といわれる具疏により、その懺悔思想の一端について窺ってきた。次に本疏である『観経疏』について、その懺悔思想をみていくことにしたい。

自身の宗教的関心に立脚して『観無量寿経』を身読した善導は、韋提希の上に実業の凡夫の実相を見出し、経の全体を一種の救済経典・懺悔経典として独自な了解を展開した。善導によれば、『観無量寿経』の主題は、無縁の大悲による念仏の衆生の摂取不捨という点に見出され、それを釈相廃立・釈意隠顕という独特な解釈でもって開顕している。『観経疏』における懺悔思想については、次の『定善義』の日想観の解釈を始めとして随所にその例証を見出すことが可能である。

衆生業障亦如レ是。障二蔽浄心之境一、不レ能レ令二心明照一。行者若見二此相一、即須下厳二飾道場一、安二置仏像一、清浄洗浴、

著二浄衣一、又焼二名香一、表二白諸仏一切賢聖一、向二仏形像一、現在一生懺㆑悔無始已来、乃身口意業所造十悪・五逆・四重・謗法・闡提等罪。極須㆑悲涕雨レ涙、深生二慚愧一、内徹二心髄一、切レ骨自責。懺悔已、還如二前坐法一、安心取レ境。境若現時、如レ前三障尽除、所観浄境朗然明浄。此名二頓滅㆑障也。……

この日想観の解釈に見られる業障識知についての懺悔は、定善十三観を貫通するものといって誤りではなかろう。とすれば、定善十三観は善導にあって懺悔道の展開を意味するものであったということも、あるいは可能でないかと思う。それは次の第七華座観の解釈において知ることが出来るものである。

問曰。衆生盲闇、逐レ想増レ労。対レ目冥若二夜遊一。遠標二浄境一、何由可レ悉。答曰。若望二衆生惑障動念一、徒自疲労。仰憑二聖力遙加一、致レ使二所観皆見一。云何作法住レ心而令レ得レ見也。欲二作法一者、諸行者等、先於二仏像前一、至レ心懺二悔発二露所造之罪一、極生二慚愧一、悲泣流レ涙。悔過既竟、又心口請二釈迦仏・十方恒沙等仏一、又念二彼弥陀本願一言。弟子某甲等、生盲罪重、障隔処深。願仏慈悲、摂受護念、指授開悟、所観之境願得二成就一。今頓捨二身命一仰属弥陀一。見以不レ見、皆是仏恩力。道二此語一已、更復至レ心懺悔竟已、即向二静処一、面向二西方一正坐跏趺、一同二前法一。

しかし、最もよく善導の懺悔思想が表されているのは、いうまでもなく散善義に展開された三心釈である。善導は弘願の法を開説された『大無量寿経』に立脚して、要門の教である『観無量寿経』の密意を顕彰しているが、三心釈においても『大無量寿経』に照して、解釈を施している。元来、第十八願の三信と異って一者・二者・三者と説かれる三心は、衆生における宗教心を確められたものである。そこに一者至誠心の解釈を通して、理想主義的・当為的宗教心が吟味され、次のように衆生における至誠心が根元的には虚仮雑毒の心以外になく、真実の至誠心は如来の真実心の他にあり得ないことが、徹底した懺悔の立場を介して釈明されている。

一者至誠心至者真、誠者実。欲レ明㆑一切衆生身口意業所修解行、必須真実心中作。不得外現賢善精進之相内懐虚仮、貪瞋邪偽、奸詐百端、悪性難侵事同蛇蝎雖起三業名為雑毒之善、亦名虚仮之行、不名真実業也。若作如此安

心起行者、縱使苦励身心、日夜十二時、急走急作、如炙頭燃者衆名雜毒之善。欲廻此雜毒之行、求生彼仏浄土者此必不可也。何以故、正由彼阿弥陀仏因中行菩薩行時乃至一念一刹那三業所修皆是真実心中作。凡所施為趣求亦皆真実。

善導の三心釈の真意は、その教言を深く聞思した親鸞の厳密な実存的了解によって正しく開顕されるに至ったものである。確かに、「不得外現賢善精進之相内懐虚仮」という至誠心釈を、「不レ得三外現二賢善精進之相一内懐二虚仮一」と読んだ親鸞の了解は、あくまでも親鸞独自の了解であることに間違いはない。しかし、それが、実には善導の真意でもあることは、至誠心釈における機についての徹底した懺悔の表白を熟読聞思するならば、充分察知されるところである。親鸞の了解は、いかにも当為的教言とみられる善導の解釈を聞思する内観の過程において、そこに顕彰されてくる善導の懺悔に充ちた真意を、そのまゝ表明したものとみられる。すなわち、「外に賢善精進の相を現じて内に虚仮を懐くことを得ざれ」とは、善導における自戒の教言であるが、「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐きて」とは、それを潜った善導における懺悔の表白に他ならないのであり、善導自身が三心釈に隠顕のあることを示しているとみるべきであろう。換言すれば、至誠心を真実心と抑えて経の隠顕を確認した善導は、それを解釈した了解にもまた自づから隠顕の義を具えていることを示していると見られるのである。

一者至誠心釈における徹底した機の自覚と、そこに開示される法蔵の願力である利他真実の対応関係は、その必然的展開として二者深心釈に及び、次の二種深信として明らかにされている。

一者決定深信二自身現是罪悪生死凡夫、曠劫已来、常没常流転、無レ有二出離之縁一

二者決定深信下彼阿弥陀仏四十八願摂二受衆生一無レ疑無レ慮乗二彼願力一定得中往生上

この二種深信における前者の機の深信ほど徹底して自身における回心懺悔を表白した言葉はない。無始時来、未来永劫にかけて無有出離之縁の存在である。それが現在のこの身における実存の内観において語られているのである。

それはもはや理性や良心による自身の内省とは全く質を異にした宿業の身の自覚そのまゝの表明に他ならない。その宿業の身が乗彼願力の身として、如来の摂取不捨の大願業力の中に在る。そこに懺悔と讃嘆の悲喜交流する世界が開けているというべきである。そしてそこに善導によって存在の故郷と表現された、如来の真実功徳の世界である浄土に還帰すべく回向発願していく宗教心が展開していくのであり、それが三者回向発願心と説かれたのである。

二種深信に集約される三心釈は、求道の歴程を見事な譬喩的表現をもって表した二河譬と対応するものであり、そこに一者至誠心の確認から開かれた善導における懺悔道の展開を見出すことができる。懺悔の人である善導によって撰述された『観経疏』は、善導の懺悔録であり信仰告白の書であるといっても誤りではない。『法事讃』に示された「謗法闡提回心皆往」、そこに懺悔の到り着く究極の立場があり、誓願一仏乗として真宗が開顕される現実的基盤がある。善導における古今楷定の偉業は、偏依善導一師とまで讃仰した法然の浄土宗独立を介し、親鸞に至って大乗仏教における浄土真宗の開顕として果遂されたことは周知のところである。その親鸞における懺悔道について考察するに先立ち、源信・法然における懺悔道について一言触れておくことにしたい。

源信の『往生要集』巻中末には、正修念仏を助成する方法を説く中で、懺悔衆罪を採収している。そこでは、龍樹の『智度論』に依って懺悔発露の重要であることを述べ、弥陀に対する懺悔を示した後、『心地観経』における理懺について注意し、次のように問答している。

問。真観二念仏一既能滅レ罪。何故更修二理懺悔一耶。答。誰言一一修レ之。但随二意楽一。何況観三衆罪性空無二所有一、即是真実念仏三昧。

源信の立場は、「若約二一人一順レ機為レ勝、若汎爾判理懺為レ勝」というように、衆生の意楽に随うべきことを説き、必ずしも理懺に拘泥はしていない。そして、「菩薩必須昼夜六時修二懺悔・随喜・勧請三事一」という『智度論』の文を引用した後、「五念門中礼拝之次応修此事」と述べて、三悔と『浄土論』の五念門を合糅し、『十住論』に説かれた三

悔の文を引用している。その点から源信の懺悔思想は主として龍樹の『智度論』・『十住論』に基づき、『心地観経』によって理懺を究極のものとしながら、事懺による滅罪・福徳の修得をも重視していることが知られる。台嶺の巨匠として一大仏教を究め、恵心流の開祖として教界の内外に多大な感化を及ぼしながら、頑魯の者と自称し念仏三昧を事とした源信である。その教学の全容を理解することは容易でないが、その基底に深い懺悔思想があったことは、充分推察し得ることであある。

法然が『往生要集』に引用された善導の就行立信の文を披閲することを機として回心し、雑行を棄てて正行に帰したことは、よく知られている。三学非器と悲傷し、十悪・愚痴の身と懺悔した法然は、『選択集』三心章に『観経疏』および『往生礼讃』の三心釈の全文を引用しているが、『往生礼讃』における三品の懺悔の文、未見の『般舟讃』の文は『選択集』に引用されていない。そして『往生要集釈』では、『往生要集』助念方法門に説く六法について、

二約二第五門一者、付レ之又有レ六。一方処供具、二修行相貌、三対治懈怠、四止悪修善、五懺悔衆罪、六対治魔事、此六法中、以二第二第四二門一為二往生要一、第一第三第五第六四門是非二往生要一。故捨而不レ取也。

といって、懺悔衆罪については無視している。更に法然の著作における三心釈の引用にしても、顕説にみられる当為的意味で引用されており、親鸞のようにその隠意を実存的に解読することはみられない。しかし『選択集』の掉尾に、

今茲集二念仏要文一、剰述二念仏要義一。唯顧二命旨一、不レ顧二不敏一、是即無慚無愧之甚也

と卑謙する法然の語は、『選択集』を撰述した法然の基本的姿勢を示すものといえるであろう。法然においては、善導と同じく念仏が懺悔の行であり、念仏を離れて懺悔の行はあり得なかったことである。それは懺悔の語なき懺悔の念仏とでもいうべきであるかも知れない。[12]

では親鸞において、懺悔道がどのように展開されているか、章を改めて窺うことにしたい。

五

親鸞において、よき人法然との値遇による唯ひとたびの回心は、その求道の歴程の上で決定的意味をもつ出来事であった。回心は、真実との値遇を求めて生きる人間にとって、その存在の全てをかけた決断によるものであり、そこに前念命終後念即生という本願の成就による仏弟子の新生が語られている。賢者の信を聞いて生きる愚禿の立場は、しっかりと宿業の大地に根をおろし、われらなる群萌の大地から、一歩も離れることはあり得なかった。我われが親鸞の著作において見出すのは、その透徹した人間凝視の眼であり、如来および師教の光によって照射された人間における罪業の深さである。

『教行信証』の信巻に、親鸞は善導の三心釈を引用するが、そこに独自な読み替えをするとともに、自利真実に関する部分は乃至して化身土巻に引用するという厳密な態度をもって臨んでいる。それは親鸞における信心の確めの厳しさを物語っているが、親鸞の懺悔道を考察する上で、先ず注目されるのは、善導の三心釈を基底として、本願の三信を窃以した三信釈であろう。善導の三心釈は弘願の法を説く『大無量寿経』に立脚して『観無量寿経』における要門の三心を解読し、自利と利他の真実を弁別したものであった。親鸞はその善導の立場を継承しながら、善導とは逆に善導の三心釈を基礎として、そこから本願の三信を推求するのであり、そこに宿業の身の懺悔において法蔵の大悲回向の願心を開顕する親鸞教学の特質を窺い知ることが出来る。すなわち親鸞は、一心帰命の信が我われに発起し、それが願生心として信それ自体を自証し展開していくことを三一問答において開顕している。すなわち仏意釈の至心釈には次のように説かれている。

仏意難レ測、雖レ然竊推二斯心一一切群生海、自二従無始一已来乃至今日至二今時一、穢悪汚染無二清浄心一虚仮諂偽無二真実心一。是以如来悲二憫一切苦悩衆生海一於二不可思議兆載永劫一行二菩薩行一時、三業所修一念一刹那無レ不二清浄一、無レ

不二真心一。如来以二清浄真心一成二就円融無碍不可思議不可称不可説至徳一以二如来至心一回二施諸有一切煩悩悪業邪智群生海一。則是彰二利他真心一、故疑蓋無レ雑。斯至心則是至徳尊号為二其体一也。

親鸞はここで無始時来流転を重ね来った身の実相についての内観を通し、その流転の人生を本願実現の場として、永劫の修行を積累される法蔵の願心との値遇を明証している。それはまさしく『大無量寿経』の嘆仏偈に、「仮令身止　諸苦毒中　我行精進　忍終不悔」と説かれた法蔵因位の願心が、至徳の尊号を体として宿業の身の骨髄にまで徹到し来る大悲回向の心を、余すところなく語り告げている。仏意釈は、その衆生における懺悔と如来に対する讃嘆との悲喜交流において展開されたものである。親鸞が至徳の尊号を体として生きる金剛心の行人である真仏弟子について、

誠知、悲哉、愚禿鸞、沈二没於二愛欲広海一　迷二惑於二名利太山一、不レ喜レ入二定聚之数一、不レ快レ近二真証之証一、可レ恥可レ傷矣

と、悲喜の涙をおさえて表白しているのは、そのことをよく示している。それは、まさしく師教、そして師教を通しての本願との値遇によって露わとなり、聞思の道を通して限りなく深まりゆき展開していくものである。

親鸞は『教行信証』化身土巻本に、専修雑心という二十願の機を問題にして、『往生礼讃』に依って、

無レ念二報彼仏恩一、雖レ作二業行一心生二軽慢一、常与二名利一相応故、人我自覆不レ親二近同行善知識一故、楽近二雑縁一自二障障三他往生正行一故

という四失を挙げ、次のように悲歎している。

悲哉、垢障凡愚、自二従無際一已来、助正間雑、定散心雑故、出離無二其期一。自度二流転輪回一、超二過微塵劫一、回レ帰二仏願力一、回レ入二大信海一。良可二傷嗟一、深可二悲歎一。

真門釈下の悲歎は、別序に「迷二定散自心一昏二金剛真信一」と示された浄土他流の機に対するものであるが、それを

真宗門徒として悲歎せざるを得ない親鸞の測り知れない悲しみの深さを表している。親鸞が如来の自然のはからいの前に徹頭徹尾問い続けなければならなかった問題は、人間自力のはからいという根源的罪障である。それは不可思議なる如来の願力自然に対してまで、それを実体的に思慮分別して止まない程に執拗なものとして、身に纏縛しているものである。そこに真実の報土が開示されることなく、徒らに辺地・懈慢・疑城胎宮という方便化土に停滞し、閉塞された状態にあって無量光明土を憬仰することのない凡夫の痛ましい状態がある。親鸞はそのような状況を深く見据えながら、そこに一途に「念仏には無義をもて義とす」と説き、「浄土宗の人は愚者にかえりて往生す」と語る、生涯聞き習ってきた師教に立ち還り、愚禿の大地に徹して生きた。深い懺悔の思いを含む愚禿の名のりは、末法濁世を生きる仏弟子の自重に充ちた名のりでもある。

親鸞が外なる聖道門仏教の頽廃と、内なる善鸞事件を機縁として著した『正像末和讃』の『愚禿悲歎述懐』は、善導の至誠心釈の体解を通して歎異の精神を明らかにしたものである。そこに我われは仏弟子における懺悔と批判と祈念を聞き取ることが出来る。また『疑惑罪過和讃』は、『大無量寿経』の智慧段に拠って、仏智疑惑の罪過を厳しく教誡したものであるが、そこにも親鸞の深い懺悔と、真実信の獲得を究極的関心事とした親鸞の深い祈念を見出すことが出来る。懺悔の人善導の勧化の下に生涯懺悔に徹して生きた親鸞は、『往生礼讃』に説かれた三品の懺悔の文を『教行信証』の化身土巻本に引用し、『善導和讃』にも讃詠している。無慚無愧のこの身という告白ほど、徹底した懺悔の表白はあり得ない。そこに一生造悪の凡夫として地獄必定の身を生き抜いた親鸞の真面目に接するが、親鸞はその地獄の地底において念仏の信に生きたのであり、そこに「罪悪も業報を感ずることあたわず」、「善きことも悪しきことも業報にさしまかせて生きる」と語った無碍人の世界が開けている。親鸞にとって、『尊号真像銘文』に「南無阿弥陀仏をとなうるはすなわち無始よりこのかたの罪業を懺悔するになるともうすなり」と表された、願力自然の力用による念仏こそ懺悔の道に他ならなかった。実に懺悔は自力を絶した他力の催しとして生起するものである。

① 澤田謙昭稿「仏教に於ける懺悔の種々相と善導大師」（藤堂恭俊編著『善導大師研究』所収）
② 水野弘元著『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』六一四―九頁。
③ 金子大栄著『宗教的覚醒』五三―五頁。
④ 平川彰著『初期大乗仏教の研究』一二四、五一八頁。静谷正雄著『原始大乗仏教の成立過程』一一八―一二一頁。
⑤ 梶山雄一著『大乗仏典・親鸞』三三四頁。
⑥ 壬生台舜著仏典講座『金光明経』解題一四―二五頁。金子大栄著『宗教的覚醒』五五―六一頁。
⑦ 香川孝雄稿「罪悪観の系譜」（浄土宗学研究第五巻一二三頁）但し、香川論文は原始経典における罪の用例として引かれているのであって、それを悲化後と対応したのは全くの私見である。
⑧ 長谷岡一也著『龍樹の浄土教思想』一四四頁。
⑨ 矢吹慶輝著『三階教の研究』五三四―五頁註⑫
⑩ 塩入良道稿「懺法の成立と智顗の立場」（印度学仏教学研究　第七巻二号所収）「中国仏教儀礼における懺悔の受容過程」（同上　第十一巻二号所収）
⑪ 藤原幸章著『善導浄土教の研究』四三―六四頁。
⑫ 坪井俊英著『法然浄土教の研究』三七二―三八八頁。